

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K14201

研究課題名(和文)国語科における主題単元学習の通時的・共時的研究を通した学習モデルの開発

研究課題名(英文)Development of a learning model through diachronic and synchronic research on thematic unit learning in Japanese language arts

研究代表者

池田 匡史 (IKEDA, MASAFUMI)

岡山大学・教育学域・講師

研究者番号：60820553

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文):本研究は、国語科教育において、「人間、社会、自然、言語、文化、自己、愛、青春など」抽象的な事柄の追究を構成原理とする「主題単元学習」論の展開とその意義を明らかにする際に、これまで十分に検討の対象とされてこなかった、戦前の教育営為と主題単元学習の関係、アメリカでの主題単元学習の展開、現代的な意義、の追究を行った。つまり、国語科における主題単元学習の成立に至るまでの流れやその学習が持つ価値を、通時的、共時的に明らかにすることを通して、現代的な学習モデルの開発を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本での単元学習論の展開に関しては、戦後から2000年代までの展開がすでに検討されている。しかしながら、戦前・戦中の教育営為との繋がりで単元学習を捉える議論はなされていなかった。また、アメリカの実践レベルでの取り組みまで十分な検討がなされた研究の不足や、単元学習の種類の中でも、特に近年叫ばれる「主体的・対話的で深い学び」や「カリキュラム・マネジメント」の観点からの教育営為に密接すると言える、主題単元学習に着目した研究となると、手をつけられていないのが現状であったなど、本研究開始に存在した課題を一定程度解消したものであると考えられる。

研究成果の概要(英文):In this study, when clarifying the development and significance of the theory of "thematic unit learning," which is based on the pursuit of abstract matters such as "human beings, society, nature, language, culture, self, love," in Japanese language arts education, I investigated the following issues that have not been sufficiently examined: 1) the relationship between prewar educational activities and thematic unit learning, 2) the development of thematic unit learning in the U.S., and 3) its contemporary significance. In addition, I have investigated 1) the relationship between prewar educational activities and thematic unit learning, 2) the development of thematic unit learning in the U.S., and 3) its contemporary significance, which have not been the subject of sufficient study.

研究分野：国語教育学、教科教育学

キーワード：国語科教育 単元学習 アメリカ PBL 植民地 古典 主題単元学習 教育史

1. 研究開始当初の背景

主題単元学習は、単元学習の分類の中の一つである。そもそも単元学習は、戦後初期にその概念がアメリカより導入された、「学習者の興味・関心・必要性に応じた価値ある話題について組織されたひとまとまりの学びの活動であり、その活動を通して、言葉の力・学ぶ力を育てようとするもの」(松崎,2015)である。その中でも、主題単元学習は「人間、社会、自然、言語、文化、自己、愛、青春など」抽象的な事柄の追究を構成原理とするもの(野地,1988)。

平成29年3月に告示された学習指導要領で強く訴えられた「主体的・対話的で深い学び」の達成を目指そうとする際、国語科におけるこれまでの単元学習論を参照する動きがいくつか見られる。確かに国語科における単元学習論は、学習者を中心に考え、主体的な学びを達成することを目指し、ことばの学びを達成しようとしたものであった。そのため、現在の視点で国語教育実践を構想する際に、単元学習論の展開を参照することは有効な手立てである。さらに同時に強く訴えられている「カリキュラム・マネジメント」の確立の重要性は、教育課程に教科横断的な視点を持ちこむことの必要性を投げかけるものであった。今後の学校教育においては、その具体的なカリキュラム編成や学習の在り方を探ることになるであろう。近年アメリカにおいては、主題単元学習(thematic unit)をクロスカリキュラムと関係づけた学習の展開が報告されている(Roe&Ross, 2005 など)。つまり、教科横断的な学習の具体像を、国語科教育の立場から検討する場合に手掛かりとなるものに、主題単元学習があると言える。ただ、これまでの主題単元学習の営みを明らかにし、その価値を検討する研究は、未だ十分な状況にあるとは言えない。このことを踏まえると、これまでの国語科における主題単元学習の取り組みを通時的に評価すると共に、国外にも視野を広げ、共時的に検討することでその具体像を明らかにすることは、喫緊の課題である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、国語科における主題単元学習の成立に至るまでの流れやその学習が持つ価値を、通時的、共時的に明らかにすることを通して、現代的な学習モデルを開発することにある。上記、「1. 研究開始当初の背景」を踏まえ、本研究で設定するリサーチクエスション(RQ)は次の3点である。

- 戦後、主題単元学習の展開に至る土壌として、どのような戦前の教育営為が位置づくか？
- アメリカでは、国語教育として主題単元学習をいかに展開したのか？
- 現代において主題単元学習は、どのような示唆を与えるか？

3. 研究の方法

本研究の方法は、主に国語教育学における歴史的研究と実践的研究の接続のモデルとなるように、文献調査と実践研究を採用する。具体的な文献研究の対象は、研究開始当初の研究上の課題を踏まえ、次のように設定した。

日本での主題単元学習論の展開に関しては、戦後から2000年代までの展開がすでに検討されている。しかしながら、戦前・戦中の教育営為との繋がりで主題単元学習を捉える議論はなされていない。そもそも戦前の単元学習の展開に対しては、「近代日本においては単元論そのものが不毛であったのか否かを、近代日本の単元論に関する研究がほとんど無い現状で判断することは難しい」(橋本,2009)との認識から近年、研究の俎上に載せられ、既存の教科枠を超えた先鋭的な取り組みが明らかにされている。では、国語科という教科の枠を重視する立場によるものはどうだったのか。この残された課題を追究することが、戦前の教育営為と戦後の主題単元学習論との関係を明らかにすることに繋がると考えられる。

またアメリカでの主題単元学習論の展開に関しては、堀(2004)など、1980年前後のアメリカにおけるホール・ランゲージ運動に着目した研究がなされている。その一方で、単元学習論が大々的に導入されることになり、日本の国語教育関係者が参照したであろう戦後初期の段階や、比較的現代に近い段階での主題単元学習の展開を明らかにすることが課題として残されている。

以上のことから、本研究の文献研究の対象を 戦前の教育営為と主題単元学習の関係、アメリカでの主題単元学習の展開と設定し、それを踏まえて導かれた 現代的な意義、を明らかにすると言う手順を採用した。

4. 研究成果

(1)戦前の教育営為と主題単元学習の関係

昭和初期郷土教育運動において、郷土国語読本を編纂した取り組みとして、愛媛県の徳田尋常高等小学校による『徳田校 郷土国語讀本』を取り上げ、内実を考察したものである。この読本が、韻文教材を多く取り入れることで文学的色彩を取り入れるとともに、形式面では国定国語教科書に近い性質を持ち、内容面でも空間軸、時間軸の観点から意図のある教材配列がなされていたことを明らかにした。これは、単元学習の発想が見出される土壌にあるものであると推察され

た。

また、同じ文脈の研究として、戦前の国語教育営為のなかで展開されていた単元学習の思潮を探ることを目的とし、福井県を中心に活躍した実践者で、当時の新教育の思潮をうけた国語教育実践のあり方に関する議論も重ねている、岡島繁による国語教育論に焦点を当て、単元学習的な思潮の土壌と位置づけられる論や学習の具体像を明らかにした。

このような発想は、戦前における植民地でも展開されていた。例えば植民地「満州」における日本人の教育のあり方を現地理科教科書掲載の植物の種類観点から考察した研究を発表した。その分布範囲や用途に応じて分類し、教科書出現状況を定量的に評価した。結果、有用植物が最も多く、農業政策上の意図があったこと、種の分布の観点からは、日本と満州に分布する植物が頻繁に登場する一方、日本固有種は3種のみ掲載されていたことから、植民地と宗主国の両方に根差す生徒の育成を目指していたことを指摘した。また、満州における、言葉の学びの面での幼稚園と小学校第一学年の連絡の思潮を探った。具体的には、生田美記が、『南滿教育』誌において、1923年から *The Elementary School Journal* 誌で連載した S.C.Parker & Alice Temple の論を翻訳したことに着目し、その論考の言葉の学び観、生田がその思潮を満洲に広げようとした理由を検討し、単元学習的な実践像が求められていたことを明らかにした。

(2)アメリカでの主題単元学習の展開

1950年代のアメリカで、主題・話題単元がいかに論じられていたのかを、*English Journal* 誌の中でそれらに言及した論考を抽出し、検討した。結果、学習者の興味、経験、多様性を重視した、言語活動領域を跨ぐ学習 当時のアメリカでの課題を乗り越えられる、生徒からの支持されている学習とされ、主題と教材との無理な関連付け、能力面、興味の継続などが、留意点であったことを明らかにした。

また、近年の日本の学校教育でも注目されつつあり、アメリカの単元学習の系統から生じた学習方法である、生徒と教師が共に学習計画を立て、何をどう学ぶかを決めていくという、「プロジェクト学習 (Project Based Learning)」のあり方を理論的、実践的に論じた著書である、Suzie BOSS & John LARMER による *Project Based Teaching* の翻訳書の刊行も行った。

(3)現代的な意義の実証

アメリカでのデス・エデュケーションのカリキュラム開発論を検討しつつ、それを日本の国語科に援用する可能性を、闘病記という文章ジャンルの特性から検討したものである。その際に、正岡子規による作品の教材性を検討している。

また、主題単元の一部に見られた、ある主題に対する社会の認識を取り上げる国語科学習という点をさらに具体的にするために、高等学校における古典教育論として、物語行為に着目した言説論に基づく取り組みを、さらに拡張させ、学習者が言説をつくり上げることにまで射程を伸ばす実践を開発した。実際に実践したものの分析により、言語によって生成された社会の認識を対象にした批判的リテラシーの育成につながられることを確認した。研究の構想、実践の分析、論文の執筆を行った。

また、古典テキストだけではない文脈での実践開発を行った。国語教育研究において、教材的な価値が指摘されつつあるものの、具体的な実践が十分に展開されていないポストモダン絵本について、高等学校における具体的な実践を開発し、その意義を分析した。比較的読むことに困難を抱く学習者が、社会との関連づけなど、テキストへの意味づけ行為を行っている姿を示し、それが教材性の一つであると結論付けた。

以上のような成果は、戦前の教育営為との関係で国語科における単元学習論を捉える研究やアメリカの実践レベルでの取り組みまで十分な検討がなされた研究の不足といった、本研究開始に存在した課題を一定程度解消したものであると考えられる。

また、上記「(3)現代的な意義の実証」にあたり、社会のある「言葉」についての認識という面にクローズアップすることの価値を見出したため、次のような新たな知見も付随した生み出すことができた。和歌共同体の中で受容、創作される際、言語化不可能な側面も共有されていたものと考えられる古典和歌について、高等学校国語科における和歌学習で、その局面を俎上に乗せられることはなかったことを踏まえ、和歌伝統をも踏まえた具体的な実践を開発するとともに、その分析を行った。

さらに、「(1)戦前の教育営為と主題単元学習の関係」の延長上にある研究として、ヴァリアントが認められている「メロスの伝説」テキスト群ではあるが、植民地における展開に目が向けられていなかった満洲における現地人向けの「国語」(=中国語)教科書に採録された「メロスの伝説」教材を発見したことで、そこに植民地教育の思潮が映し出されていることが示唆された。

以上のような、偶発的な成果も生み出した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 池田匡史	4. 巻 37
2. 論文標題 満洲の現地人向け中国語教科書における「メロスの伝説」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岡山大学国語研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 池田匡史・竹田智美	4. 巻 182
2. 論文標題 高等学校国語科におけるポストモダン絵本を用いた実践像 テキストへの意味づけを促すために	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岡山大学大学院教育学研究科研究集録	6. 最初と最後の頁 13-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 池田匡史・藤川千穂	4. 巻 45(2)
2. 論文標題 高等学校国語科における「感じ」の共有を目指す和歌学習の開発：言語化困難な心的体験を表現する試み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本教科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 25-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18993/jcrdajp.45.2_25	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 池田匡史	4. 巻 2022
2. 論文標題 高校生が言説の創造を目指す古典教育実践：物語行為への批評を踏まえて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本教科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 37-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18993/jcrdajp.45.1_37	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 池田 匡史, 有馬 菜月	4. 巻 60
2. 論文標題 高校生は「羅生門」の教材的価値をどう評価するか 【作品 / 言語能力の向上に資するもの】として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 兵庫教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 99-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池田匡史	4. 巻 59
2. 論文標題 国語科におけるデス・エデュケーション教材としての闘病記の価値 正岡子規の闘病記から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 兵庫教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 89-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ikeda Masafumi, Yamamoto Masaya	4. 巻 17
2. 論文標題 Ideology in Science Textbooks for Japanese Students in East Asian Colonies: Focusing on Plant Species that Appear in Manchuria Textbooks	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Eurasia Journal of Mathematics, Science and Technology Education	6. 最初と最後の頁 em1947 ~ em1947
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.29333/ejmste/9757	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池田匡史	4. 巻 58
2. 論文標題 国語科における戦前の新教育と単元学習的発想との関係に関する一考察 岡島繁の国語教育論を手がかりに	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 兵庫教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 77-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池田 匡史	4. 巻 88
2. 論文標題 1950年代アメリカにおける話題単元・主題単元に対する評価 <i>English Journal</i>誌掲載論考を対象に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語科教育	6. 最初と最後の頁 3～11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20555/kokugoka.88.0_3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池田 匡史	4. 巻 61
2. 論文標題 昭和初期郷土教育運動における郷土国語読本の編纂 徳田尋常高等小学校『徳田校 郷土国語讀本』を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語教育研究	6. 最初と最後の頁 22 - 34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田 匡史	4. 巻 32
2. 論文標題 満洲における幼稚園・小学校間の言葉の学びの連絡に関する思潮	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 兵庫教育大学学校教育学研究	6. 最初と最後の頁 25 - 32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 池田匡史
2. 発表標題 ポストモダン絵本を教材とした国語科授業実践開発 高等学校三年生を対象として
3. 学会等名 第36回岡山大学教育学部国語研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 池田匡史、黒川麻実
2. 発表標題 植民地間の民話教材の流用はいかになされたのか？ 朝鮮・南洋群島・満洲の「水中の玉」
3. 学会等名 第141回全国大学国語教育学会 世田谷大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池田 匡史
2. 発表標題 1950年代アメリカにおける話題単元・主題単元への評価
3. 学会等名 第137回全国大学国語教育学会 仙台大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 スージー・ボス、ジョン・ラーマー、池田匡史、吉田新一郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新評論	5. 総ページ数 400
3. 書名 プロジェクト学習とは	

1. 著者名 ウェンディ・L・オストロフ、池田匡史、吉田新一郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 新評論	5. 総ページ数 356
3. 書名 「おさるのジョージ」を教室で実現	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------